

二ホンミツバチの養蜂を通した百々水辺愛護会活性化の試み

〇浜崎健児¹、今井菊平²、近藤 悟³、望月建彦⁴、吉橋久美子¹、洲崎燈子¹

（¹豊田市矢作川研究所、²百々水辺愛護会、³豊田市地域学校共働本部、⁴中部日本みつばちの会）

【新たな楽しみとしての二ホンミツバチ】

豊田市では、矢作川の河畔を中心に、草刈りやごみ拾い、竹伐りを行う18団体の「水辺愛護会」が活動しています。この取り組みは川辺の景観を良好に保ち、人と川を結ぶ大きな役割を果たしてきました。しかし、会員の高齢化や人手不足などによって、多くの愛護会でモチベーションが上がりにくい状態にあります。そこで、二ホンミツバチの養蜂に取り組むことで採蜜の楽しみを創り出し、愛護会活動を活性化しようと考えました。

【百々水辺愛護会】

矢作川沿いに作られた石畳の散策路を整備しようと2003年に発足しました。河畔には竹が密生する場所がある一方で、開けた場所にはヤブツバキが自生しており、初冬には沢山のきれいな花を咲かせます。現在、愛護会の会員数は16人で、60代～70代の男性が中心です。毎月第2日曜日に活動しています。

【二ホンミツバチの養蜂】

2017年、活動地に近い会員の畑に巣箱を置き、中部日本みつばちの会と研究所がサポートするかたちで養蜂を始めました。最初は巣箱内の掃除中に刺されたり、スズメバチが何匹もやって来て対応に追われたり、いつのまにか逃去してしまったりと多くの苦労もありました。しかし、ミツバチの様子を見ながらゆっくり作業すると刺されることはほとんど無くなり、今では会員だけで管理や対策ができるようになりました。ミツバチの活動も安定してきており、現在は3つの巣箱を管理しています。



中部日本みつばちの会
による巣箱管理の指導

～ 採蜜会 ～

毎年10月上旬に実施している採蜜会には、会員だけでなく、豊田市地域学校共働本部主催の土曜学習を通して申し込みのあった小学生とその家族も参加しています。二ホンミツバチの生態や作物の受粉に果たす役割などを学び、採蜜作業を間近で見学したあとは、採れたての巣蜜の試食も行っています。参加者は、1年目は4家族でしたが、2年目には15家族、3年目には27家族と年々増えており、反響の大きさに驚いています。



採蜜会の様子（2019年）



対岸から見た活動地



二ホンミツバチ



石畳の散策路



会員の皆さん



散策路の整備

～ 分蜂の捕獲 ～

今年は春先の半月くらいの間に4～5回分蜂したため、これに合わせて作業するのは大変でした。それでも、今井会長の幼馴染みの建築屋さんに巣箱を作ってもらった甲斐あって、7群の分蜂を捕獲することができました。これらは、養蜂に興味を持つ会員や地域の方にお譲りしています。



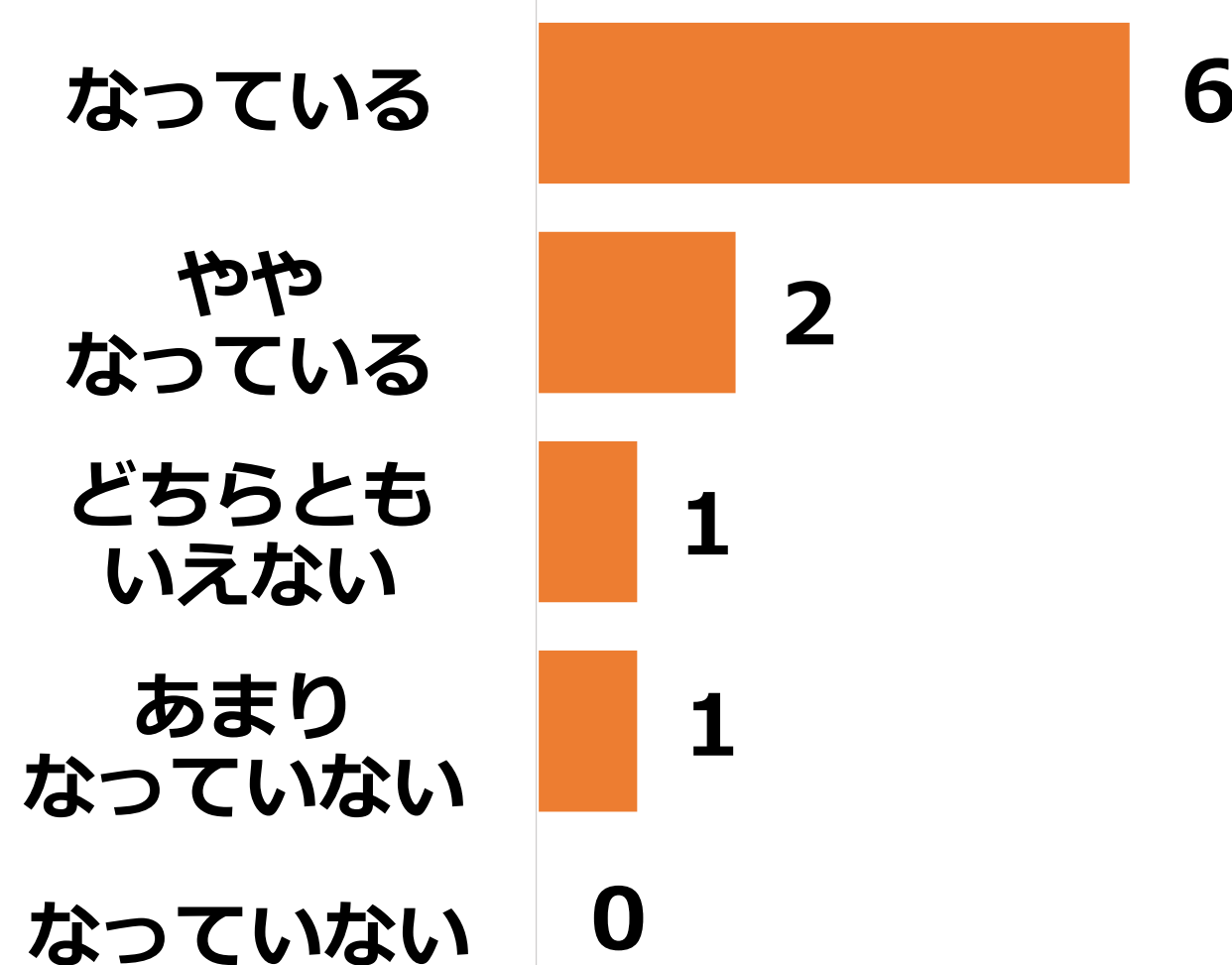
【今後の取り組み】

当初、養蜂による愛護会活動の活性化には、採れたハチミツを「愛護会の中で」楽しむことが大切だと考えていました。しかし、小学生とその家族を採蜜会にお招きしたことで、子どもたちが喜ぶ姿を会員のみなさんに見ていただくことも大切だということが分かってきました。百々町内では、採蜜会の他にも環境保全会によるタケノコ掘りなどが地域学校共働本部と連携して進められており、地域で土曜学習をサポートする機運が高まっています。今後は採蜜会だけでなく、二ホンミツバチの観察会や蜜源植物の勉強会など、土曜学習と連携する取り組みを提案・実践しながら、これらが愛護会活動の活性化に繋がるのか評価していきたいと考えています。

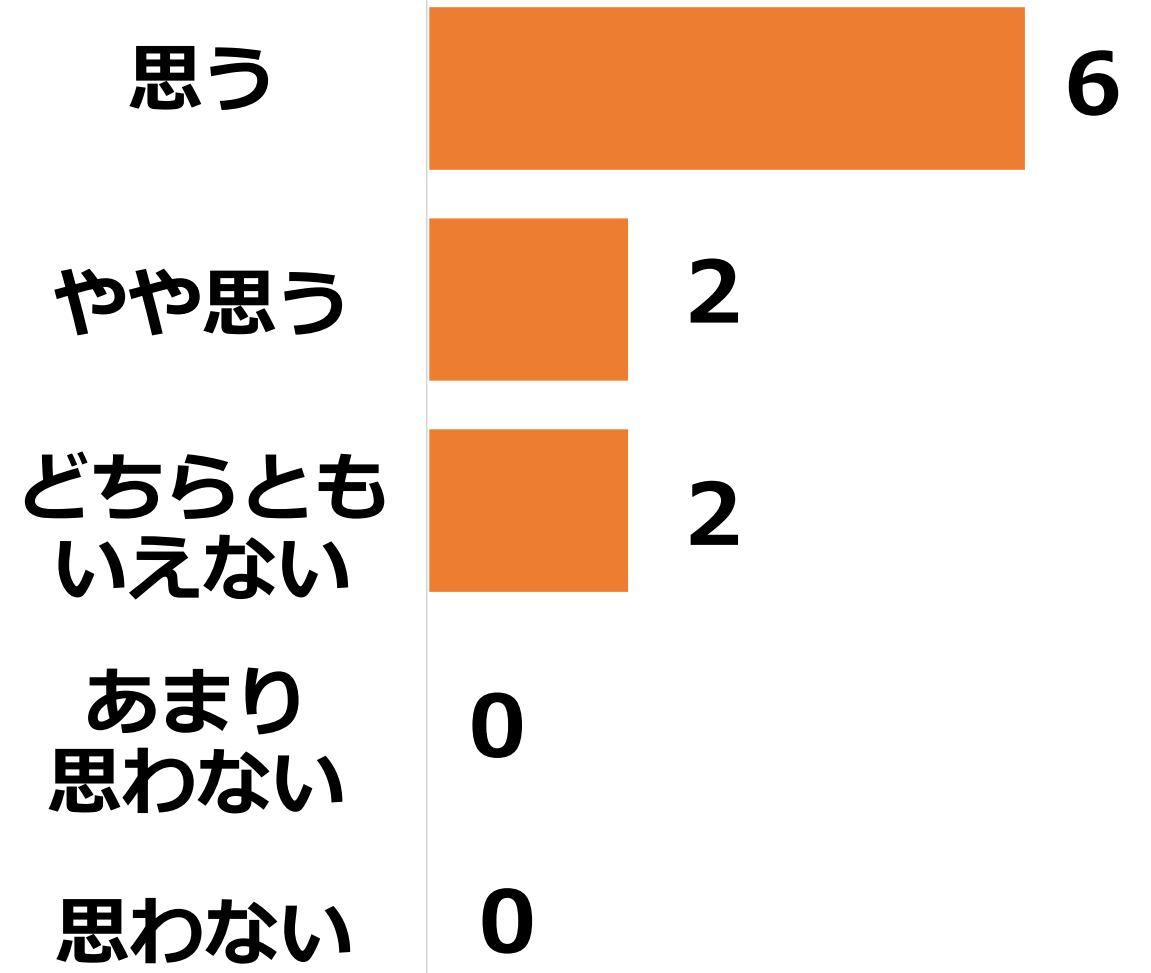


愛護会会員10名へのアンケートの結果、養蜂に関わっている人数は限られているものの（10名中5名）、養蜂が愛護会の楽しみや魅力になっていることが分かりました。愛護会活動の明確な活性化までには至りませんでしたが、モチベーションアップには一定の効果があったと考えています。

養蜂は愛護会活動の楽しみ になっていますか？



養蜂によって外部から見た 魅力が増すと思いますか？



採蜜会後に愛護会会員に行ったアンケート調査の結果（2019年）